

いわて幸福白書 2024 達増知事とクレイグ・モド氏との対談 全文

知事：モドさんは、最近、日本のどこか地方に行きましたか。

モド氏：11月に島根県に行って、たたら製鉄の作業に参加してきました。明治、20世紀に入って、たたら製鉄が一度終わったのですが、最近観光向けとして、観光客がたたら製鉄に参加できるようにしています。私は記者としてちょっと見に行きましたが、あまり参加はしませんでした。独特で、本当に危険な作業でした。男性も女性もジャンプスーツを着て作業していて、本当は3日かけてやるのですが、この時は1日夜通しで、みんな眠らずに、ずっとたたら作業をしていました。

作業の最後でケラ¹を出すときに、熱いので皆さん宇宙に行くようなスーツを着ているのですよ。ケラの周りはノロ²ばかりになっていて、運んでいる方がスリップして、それがみんなにはねたりしていて、本当に大変な作業でした。ケラを出したときには、子どもたちも100人ぐらい集まっていました。なかなかすごい作業でしたが、面白い日本の地方の伝統だと感じました。彼らは、うまく自分たちの歴史を使って、ここでしかできない経験をアピールしていました。

知事：モドさんは、日本の各地を回って、そしてそこを歩いて、地域を見て、そして地域の人と会い、そういう行事に参加したりしているんですが、どうしてそういうことをしようと思ったのですか。

モド氏：最初は大学に入学するために日本に来ました。大学院に入学する時にもまた戻ってきて。専攻がコンピュータサイエンスと文芸と芸術でした。写真もやっていて、その後独立して会社を始めて、2010年には米国カリフォルニア州パロアルトで仕事をしていました。2013年に、やはり日本が良いと思って戻ってきたのですが、なぜ日本に住んでいるのかということをも自問してみました。

マクブライドさんというオーストラリア人の友人がいるのですが、彼は外語大学の学生の時に、日本文学の授業で、松尾芭蕉などを読み始めて、文学の素顔を知るために、東海道や中山道、四国の88ヶ所、奥の細道を歩いていました。

¹ たたら操業により製鉄炉の中にできる塊。

² 不純物を多く含んだスポンジ状の海綿鉄。

知事：歴史的な場所を歩かれていたわけですね。

モド氏：そして、そんな彼から「歩きますよ」と呼ばれて、2013年に初めて熊野古道に行きました。そこで、こんな面白い歴史を感じる道もあるのだと、初めて知ったのです。彼と一緒に歩き始めたら、すごく充実している活動だなと思ひまして。何が面白かったかという
と、彼は綺麗な日本語で喋るので、田舎のいろんな人たちの家に行って、すぐに親しくなれるのですね。彼を見て、こんなに人類学的な活動ができるのだと気づきました。それに気づいたら、どんどんそういう取材をするようになりました。2013年から2016年頃までは、彼とほぼ毎年一緒に2、3か月ぐらい歩いて、それがすごく勉強になって。その後は1人で、歩き始めるようになりました。

知事：熊野古道については、ニューヨーク・タイムズに文章を寄稿して評価されたということですよ。

モド氏：熊野古道についてというより、紀伊半島について書きました。あれは2年前ですね。なぜ紀伊半島かというと、熊野古道は、世界遺産になっているので、実は世界ですごくよく知られています。インバウンドの観光客は、「熊野古道を歩いてきました」というと、大體中辺路の3日間だけ歩くのですよ。熊野古道はわかりづらく、行きづらいのですが、この3日間を歩けば「歩きましたよ」って言えるのですね。面白いのは、世界遺産で道路が登録されているのは世界中で、熊野古道とスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラの2つしかないのですね。それで共通のスタンプラリーがあって、熊野古道のスタンプとスペインのスタンプを集めると、特別なピンがもらえます。私ももらってきました。そういう楽しい組み合わせがあると良いですよ。

私が歩き始めたのは2013年だったのですが、その時には一切外国人は見かけませんでした。今ではフランス人、ドイツ人など、いろいろな国の外国人が歩いています。周辺に宿が少なく、予約は大體半年か1年前に予約しないと取れないので、5年くらい前は、野宿しているドイツ人もいました。

昔は高野山がフランスですごく人気だったのですね。高野山に行くときに、電車の行先の表示が日本語とフランス語だけだったのです。そこまでフランスに高野山の人気があったのはなぜかということ、フランス人のイラストレーターが高野山についての本を書いて、それがフランスですごく人気があって、それで高野山に行っていました。

紀伊半島は歴史と自然の豊かさをうまく使って、海外に向けて発信しています。それによってインバウンドだけではなく、日本人もたくさん歩いています。私は熊野古道の中で伊勢路が一番いい道だと思っていますが、誰も伊勢路について書いていませんので、最近では

きるだけ伊勢路を推薦しています。何で伊勢路がいいかという、中辺路とか小辺路は村が少ないのです。伊勢路は人々が住んでいる村と村の間の山道を歩いたりするので、漁業や林業の様子を見ることができし、いい宿にも泊られます。料理もすごく立派で、民俗的なことも楽しめるし、人類学的なことも楽しめるし、自然だけじゃなくて、全体のバランスがいいのです。純喫茶も少し残っているので、面白い会話もできます。

知事：やはり歴史と自然と、そしてその中で歩いたり、体を動かしたり、いろんな人間の活動ができるという、そういうところが好きなのですね。

モド氏：そうですね。最近、人類学者の宮本常一さんが1960年に出した『忘れられた日本人』という本を読み始めています。彼の真似を少ししているような感じがしていて、こんなことをすごく素敵にやっていたらよかったのだなって思いながら読んでいます。1,200以上の地方の人の家に泊まったり、インタビューをしたりしています。

今、彼の本を今読むべきだと思い、実際に読み始めて正解でした。すごく影響を感じています。なぜなら、昭和に立ち上げた喫茶店やジャズ喫茶、床屋や、それらがある村や商店街が当時すごく元気だったのですが、今はシャッター街になっています。彼が見た戦後の1950年代、1960年代と同じような状況になっているように感じます。彼がいろんな人と出会って、みんなの話を聞いて、人生のそういう幸福について、どうやったら幸福とか、ウェルビーイングを感じるのか、彼もすごく研究していたと思います。そして、彼も多分その活動ですごく幸福を感じていたと思います。

知事：モドさんが、アメリカで仕事をして、日本に戻ってきて、そしてそのときに日本に住んでいることの意味を考えたとのことですが、日本人も同じように考えなければならないと思います。日本にいて、どう生きていくのか、東京のような大都会に行きさえすればいいのかということが問われています。本当は地方の方が生活や仕事をする場所としていいのではないかとすることを日本のみんなが今考えなくてはならない時だと思います。

モド氏：日本では昔からの産業が一切なくなって、ほとんどシャッター街になっている町もありますが、日本だけではなくて、本当に今、イタリア、ギリシャ、アメリカ、フランスもそうですし、似たような問題が世界中であります。その中で、日本の何がいいかという、医療保険制度のような社会的な土台がすごく強い点だと思っています。例えば、アメリカで、万が一怪我したり、精神的な病気にな

ったりとかすると、どこまでも落ちやすい状態になっています。私は日本の社会的土台がある上で、作品を作り、豊かな人生を過ごすのが、やりやすいと思っています。だからよくインタビューで私は盛岡に行って、そういう街に癒されたっていう言葉をよく使っているのですが、それはやはり BOOKNERD の早坂さんだったり、床屋の平澤さんだったり、東家の馬場さんだったり、個人で頑張って家族を育てながら、生きがいを持って、ウェルビーイングをちゃんと大事にしながら毎日を過ごせることが当たり前になっている状態が、すごくパワーポイントだと思っています。

知事：そうですね。日本は盛岡でも、400年前にお城ができてからの歴史がありますし、それから日本は困ったときに、どこか別の場所に行くとかそういうことがあんまりなくて、やっぱり生まれた場所や住んでいる場所で助け合って生きていくということが昔からあったので、今でもそういう雰囲気が残っているんだと思います。

モド氏：そういうことが感じられることは素晴らしいと思います。ウェルビーイングは、ハピネスというより、充実感から生まれてくると思っています。やはり充実感を得るには、そういう土台がないと、いろいろリスクや不安が生まれます。何が充実の元かというと、喫茶店のクラムボンさんみたいなところでは、やはり珈琲豆を深く知りたい、BOOKNERD の早坂さんは本や芸術も深く知りたい、その深くした知恵をみんなとシェアしたい、そこからウェルビーイングがすごく生まれているとされていて、日本の今の社会の状態だと、そういうことを深く入り込むのが非常にしやすい状態になっている国だと思っています。

知事：（「2024年に行くべき52カ所」に選ばれた）山口市もそういうところがありますか。

モド氏：もちろん盛岡だけじゃなくて、山口市もそうですね。

知事：山口市に行ったときに感じたのですが、盛岡市に似てる雰囲気があるなと思います。

モド氏：私が山口市に初めて行ったのは、先ほど話したマクブライドさんに、「萩往還を歩きましょう」と誘われて、一緒に山口市をベースにして歩きに行きました。当時は盛岡市と似たような感じで、すごく綺麗な街でなかなか良いところだなと思って、去年、ニューヨーク・タイムズに聞かれたときに、山口市を推薦しました。まさか3位になるとは思わなかったのですが、でもみんな喜んでくれたみたい

です。山口市はそんなに町おこしをしなくても、すごく元気ですし、福岡と広島の間なので、すごく行きやすい場所です。また、山口市には湯田温泉とか萩往還があり、盛岡と似たようなウェルビーイング感がすごくあって、とても感動しました。特定の名物とかというより、町全体のウェルビーイング感を感じて、面白かったです。

知事：萩は江戸時代の雰囲気を残していますが、山口市はさらに古い戦国時代に、京都と同じような街を作ろうとしてお寺が残っていたりして、そういう何か歴史的な深みを感じましたね。あとは、山口県は人口だと下関市の方が多し、あとは工業が瀬戸内海の方で盛んなので、山口市は経済的には結構いろんな活動をする余裕があるのだと思いますね。

モド氏：山口県は瀬祭などのお酒が有名ですね。だから割と元気な県だと思っています。島根県の隣ですけど、全然雰囲気が違います。出雲市に行くと全然山口市とは違います。だから、うまくそういう組み合わせもできたらいい。これから県と県のそういう町おこし合いみたいなのができたらすごくいいなと思っています。

知事：モドさんは、盛岡市や山口市のような中規模都市の元気の良さに関心があるということですけど、岩手県には人口 5,000 人以下の町や村もありますが、そういう日本の地方の人口の少ないところの魅力についてはどう思いますか。

モド氏：そうですね。例えば、九州の佐賀県では、唐津焼によって、唐津市から離れたいろいろな村が元気になっています。私の知り合いが有名な陶芸家の娘さんと結婚して、唐津焼の器にプラスして料理を提供することで、現地でしか味わえない食べ物や野菜などをうまく活用しています。人口が少なくても、そういう焼き物や温泉の歴史など特徴があるとうまくいけると思いますし、そういうものがなくても中核市をベースにして、近くの町村の町おこしができると、チャンスはあると思います。

知事：そうですね。過疎の町村のように、人口がとても少ないところをどうやって経済的、社会的に発展させるかを考えたときに、都市に住んでいる人とのつながりが強いところは、発展する可能性が高いなと思いました。例えば、お祭りをやった時に、東京などからファンが来てくれることがあります。そういう魅力的な文化や歴史、美味しい食べ物などが、都市の人たちにも知られていると、持続可能な発展ができるなと思います。

モド氏：そうですね。そういうものがピンポイントで一つでもあれば、違うと思います。例えば、三重県には美鈴というところがあって、民宿とは言っていますが、ミシュランに入っている料理旅館みたいな感じのところですよ。そこは本当に素晴らしいところで、家族2代でやっていらっしゃって、三重県の尾鷲の近くのだいぶ奥深いところにあります。カラスミが有名で、日本一のカラスミだとお父さんがいつも言っています。この美鈴があるだけで関西からみんなこの町に行くのですよ。私も3月、4月に行こうかと思ったら、もうずっと満室なのですね。でも、彼らがいるあの町は、小学校全体で20人程度しかなくて、そういう状態なのですが、美鈴さんが頑張っているのですね。

また、瀬戸内海の方では、尾道のしまなみ海道っていう自転車の道ができて、地域に大きな影響を与えています。みんなが尾道になぜ行くかという、「しまなみ海道に自転車で乗りに行く」からなのですね。途中で瀬戸田町という町があって、「Azumi Setoda」というすごい高級旅館があります。この「Azumi Setoda」のために、さらにみんなが瀬戸田町に行っています。泊まらなくても自転車で通り過ぎるからちょっと覗きに行ったりとか、ホテルの前にある立派な銭湯に寄ったりとかですね。尾道市は中核市よりちょっと小さいのですが、近くの町や村がうまくベースとして使って、町おこしをしています。

知事：尾道は映画の舞台になって有名になり、私は行ったことはないのですが、テレビなどでよく見ますね。

モド氏：ダイナミックな形の街で、すごく綺麗なところですよ。やはり瀬戸内海は日本の中ですごく重要なシステムの一部で、瀬戸内海によって直島とか高松とか岡山が、うまく繋がっています。

知事：直島というのはアートの島ですか。

モド氏：ベネッセが作ったアートの島で、80年代にベネッセが最初の美術館を作って、2010年頃から世界中で知られるようになりました。今はもう夏だと、1年前でないと予約が取れません。直島がメインとなり、犬島だったり、生島だったり、いろんな近くの島と一緒に船をうまく活用して、地域を盛り上げています。

知事：すごいですね。日本の地方は本当にいいなと改めて思いますが、ニューヨーク・タイムズも、去年の盛岡に続き今年、山口市ということで、日本の地方を世界の人たちに紹介してくれたのはとてもありがたいと思っています。また、この去年の1位のロンドン、王

様が新しくなったという特別なことがあって、特別なことがないところの中では、盛岡が1位だったと思います。今年の1位のノースアメリカは月食があるから、2位のパリはオリンピック・パラリンピックがあり、何もなくて1位になったのは山口市だと思っています。まず、世界的に日本への関心が高く人気があり、その中でやはり地方をニューヨーク・タイムズが紹介したということでしょうね。

モド氏：コロナ禍で鎖国みたいになっていて、それが開かれて久しぶりに日本行けるようになったから、有名な京都などではなく、もうちょっと面白いところに行って冒険しましょうという哲学だったと思います。やはり日本には、マンガやアニメ文化などもあり、興味を持たない国はないと思っています。南アメリカ、ヨーロッパ、中国そしてアジア全体で、多くの人が日本に来たがっています。また、盛岡にとっても、2位になって、すごくいい経験だったと思います。昨年10月か11月に盛岡市の高校生たちがニューヨーク・タイムズ社に行ってきたのですよね。

知事：岩手県の事業として派遣しました。

モド氏：ニューヨーク・タイムズの編集者たちにとって、こんなにいい影響があったのは初めてかもしれないですよ。彼らが発表した「52カ所」の力が、今までちゃんと理解できていたかどうかかわからないですからね。盛岡のみんながこんなに喜んでくれて、町おこしにもなり、経済的ないい影響が生じたことは、今までになかったことだと思います。

世界中の人々が、日本に興味を持っているので、ちょっと耳に入ったことのないところに行ってみたいなと思っています。山口市は、外国人観光客はほとんど行ってないと思います。福岡市について書かれている記事は意外に多くて、WALLPAPERという雑誌では、ずっと福岡市を推しています。また、みんな広島市や姫路には行きますので、あの辺に行くんだったら、山口市に1泊でもどうですかっていうことですね。

知事：12月にマレーシアとシンガポールに行って、岩手県のお米、リンゴ、牛肉、日本酒をセールスし、あとは観光の宣伝をしてきました。私が外交官としてシンガポールの日本大使館で働いていた30年位前は、日本経済がまだ強くて、国際的にも日本経済の影響力が大きい時代でした。その頃に比べると日本の経済力は相対的に下がり、マレーシアやシンガポールでの日本の存在感やイメージが小さくなっているかもしれないと思っていたのですが、全然そうではなくて、日本食レストランの数が増え、日本の食べ物もどんどん売られており、

マンガやアニメも前よりもずっと普及していて、日本への関心、人気は30年前より高くなっているのだと思いました。

また、日本に来る観光客の数も増えていますが、日本の生活文化ですね、食べ物や普通の街の様子やお祭りなど、そういったものは東南アジアの人たちにとっても面白いのだと思います。

モド氏：やはり日本のソフトパワーですね。中核市の町おこしとかも、いいソフトパワーの一つの例になれると思っています。

今、日本がすごく特別なのは、平和な国であるということです。今はガザの戦争もあり、ロシアとウクライナのこともあり、アメリカも戦争のような政治状態になっていて、どんどん安定しないところが増えています。

知事：Eurasian groupのTop 10 riskの一番は、The US versus itself っていう Civil war kind of situation になっていますよね。

モド氏：それをすごく感じています。安全なところはもうディズニーランドしかないというような。東京は奇跡みたいなところだと思っていて、大都市でディズニーランドに行くのと同じような安全感を感じるのは、世界中で東京だけですね。というのは日本は、味のある、深みのある場所の上に、安全が含まれていて、日本の地方に行っても、心配なく冒険しやすい状態になっています。

世界中が不安定になっている中で、日本はストレスのない大変素晴らしいところであると海外の人たちは思っています。日本人は当たり前だからあまり感じなくなっていますが、これもソフトパワーです。なぜ日本は安全が実現できているのか、それがこれから世界中からのすごく大事なテーマになります。

知事：それを大事にして、持続的に発展させていきたいですね。

モド氏：多分スカンディナヴィアとすごく似ていると思っています、やはり医療保険制度があるかないとでは違います。その医療保険制度でみんなが忘れてるのは、自分が風邪とか病気になった時のためというより、周りの人たちがなっても困らないためのものということです。ご近所さんたちが困らないために、そういうものが必要です。ご近所さんが困ったりすると、全体的な安全感が下がるし、変な影響が生じます。アメリカだとそういうことを理解している人が非常に少ないと思います。

そして、ウェルビーイングを感じていないと、不安定になります。ウェルビーイングは、「仕事」から感じることも一つだと思いますし、「家族」、「コミュニティ」、「健康」、その4つぐらいが本当にうまくいっていればいいと思います。盛岡に行ったときには、その4つがす

ごくいいと感じました。

知事：思えば、東京のような大都市だと、仕事でお金を稼ぐことはできても健康を犠牲にしたり、家族を犠牲にしたりすることがあるかもしれません。働くことと、家族と楽しく過ごすことと、そして健康でいること、これらをバランスよく充実させるっていうのには、地方の方が向いているところがありますね。

モド氏：あると思います。リモートワークでいい給料をもらいながら、地方で生活できるようになりました。これからの10年、20年は、すごくチャンスだと思っています。東京の会社に勤めている私の友人で、リモートワークによって、山梨県に引っ越した芸術家が意外といて、山梨県でそういうコミュニティがちょっとずつ出来上がってきていて面白いです。東京まで行かないといい仕事が手に入らないなと思って、みんな地方から東京に出ていくのですが、もうちょっと落ち着いていたところで、子育てができたらいいいと思っている方がたくさんいます。その希望と仕事をリモートワークなどでうまくつなげられれば、チャンスになると思います。

知事：そうですね、東京の人たちのウェルビーイングも上がってほしいですからね。生活は地方の方で時々暮らすようにしたり、仕事もオンラインを使えばリモートで地方からできるので、日本全体をそうやってうまくウェルビーイングが上がるように、この地方と大都市との関係を工夫していくことがこれから大事だと思いますね。岩手県はそこできちんといい役割を果たしていきたいと思っています。

モド氏：できると思います。「自分はとても良いところに住んでいる」ということを最も感じてほしいのは、やはり小学生とか中学生、高校生。彼らにそういう影響があるとすごくありがたいなと思っています。やはり、いい町だと感じて、東京で勉強して、いつか戻って頑張りたいなということの参考になるとすごく嬉しいですね。